

多義的な名称を冠した学部を退学する学生の特徴

——大妻女子大学社会情報学部を事例として——

その2

入学時の SCT に記された将来像にみる 6 タイプ

若林 佳史*

要 約

多義的な名称を冠した学部の学生がいかなる問題を抱えやすいのかを把握するために、大妻女子大学社会情報学部を退学していった者の入学時における SCT の記述が分析された。入学前にまた入学時にどのような将来像をもっていたかという点から、退学にいたるまで、少なくとも、以下の6タイプあることが見出された。

すなわち、

①おそらく中高生時代、明確な将来像をもたず、大学進学後も大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、退学するというタイプ；

②おそらく中高生時代、抽象的・夢想的な将来像をもち、大学進学後に大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、退学するというタイプ；

③おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

④おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それを諦めてそれと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を新たに形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

⑤おそらく中高生時代、明確な将来像をもつが、多くは、それと合った大学の入試に失敗したためそれを諦めて、まれには最初からその将来像を諦めてその将来像に合った大学を受験せず、それと合わない大学に進学し、いったんはその大学での学習を踏まえた将来像を新たに形成させるが、再考するうちに当初の希望が強まり、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

⑥おそらく中高生時代、明確な将来像をもち、(多くは、それと合った大学の入試に失敗したため)それとやや合った大学に進学するが、その将来像にもっと合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

である。

*大妻女子大学 社会情報学部

1. はじめに

多義的な名称を冠した新設学部にあつては学生は様々な問題を抱えやすいのではないかと推測される。そうした学生に対する援助態勢を整えておくためには、学生らがどのようなことに戸惑っているのか把握しておく必要がある。そうした新設学部の一つ、大妻女子大学社会情報学部においては、上記のことをも目的のひとつとして〈その1〉でも述べたように、第1期生以来、アンケート調査とSCT（文章完成法）が行われている。実施時期は、第1期生と第2期生は2年進級時、第3期生以降は入学時と、入学年度によって異なり、また使用した語句も、途中から Marcia, J. E. (1964) や 園田・中釜 (1987) が用いた語句を、少し言葉遣いを改めた上で、加えるなど、入学年度によって少しずつ変更されていっている（表1参照）。

本小論では、その後退学してゆく者は、入学時のSCT（したがって第3期生以降）にて、将来像——過去における将来像、入学時における将来像——に関してどのような記述を行ったのか分析を試みたいと思う。その際、特に着目するのは、①本当に（は）やりたいと思う仕事、②進学の際の悩み、③この学校で学ぼうと思っていること、④将来どうなっているか、についての記述である。この〈その2〉ではケース・スタディを行い、他日に期する〈その3〉では統計的分析を行う。ケース・スタディからはたとえ人数は少ないとしても退学者の特徴をよく表していると考えられる特徴が、また統計的分析からは退学者の多くに当てはまる特徴が、見出されることが期待されよう。

もっとも入学時あるいは就職時にSCTを行い、その記述からその後の状況を予想しようとする試みは、本小論が始めてではない。たとえば、下仲ら (1971) は、高校入学時にSCTを行い、その後留年する生徒は教師に対して批判的な構えを持ちまた劣等感が強いことを、また藤井ら (1972) は、就職志望者に採用時にSCTを行い、その後職場で不適応をきたす者は、幼稚、小心拘

泥、自己主張、受験動機不十分、協調性欠如という特徴があることを見出している。さらに松木ら (1977) は、看護学校入学時にSCTを行い、卒業年次にて適応が劣る者は、単純、内向的、強い不全感、孤立的、協調性欠如の傾向があることを見出している。このように、高校、看護学校、および職場において、当初のSCTの記述から、その後の適応状況がある程度予測できることが示されているが、多義的な名称の学部においてはどうかであろうか。

もちろん、高校、専門学校、大学とでは、退学や留年や不適応の位置づけや原因や理由といったものが異なることは言うまでもない。たとえば、看護学生の不適応は、看護職という対人援助の職業に対する自信喪失が原因であることが多い。いっぽう、多義的な名称の学部の大学生の退学は、〈その1〉でみたように、別の分野を学ぼうと他の大学に入りなおすためになされることが多い。そうすると、その後別のことを学びなおすために退学していく者は、そもそも何を学び、将来どんな職業に就こう、と考えて大学に入学してきたのか把握することが大切ということになる。このことに留意して入学時のSCTの記述を分析していきたい。

2. 将来像にみる6タイプの退学者——入学時のSCTの分析

大学入学前に将来についてどのように考え、どのような将来像や職業像（以下、まとめて、将来像という）をもち、大学入学時にどのような将来像をもったか、という観点から入学時のSCTの記述をみてゆくと、最初に結論を述べてしまうことになるが、退学にいたるまで、少なくとも、以下の6つのタイプがあることが見出された。

すなわち、

①おそらく中高生時代、明確な将来像をもたず、大学進学後も大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、退学するというタイプ；

②おそらく中高生時代、抽象的・夢想的な将来像をもち、大学進学後に大学での学習を踏まえた明

表1 これまでに行なった文章完成法

〈領域〉	1期生の2年進級時 (1993年4月調査)	2期生の2年進級時 (1994年4月調査)	3, 6期生の入学時 (1994, 1997年4月調査)	4, 5, 7, 7~11期生の入学時 (1995, 96, 98~2002年4月調査)
学生生活の 最初の感想	①この大学に入って、最初に感じたことは… ②入学して一年たって、最近感ずることは… ③一年間、授業をうけて強く感ずることは… ④この学部で接した先生は…	①同左 ⑥同左		
授業・学業	⑤社会情報学部って何？と他の人から聞かれると私は… ⑥他の学部と比べると、この社会情報学部は… ⑦この学部に入ってから、予想外だったことは… ⑧他の2専攻と比べると、私の専攻は…	②同左 ⑤同左 ③同左	②同左	②「社会情報学部って何？」と他の人から聞かれると、私は…
学部や専攻の 位置づけ	⑨卒業後、私は… ⑩10年後、私の生活は… ⑪私にとって仕事することは…	⑦この学部を卒業後、私は… ⑧10年後、私の生活は… ⑨私にとって仕事することは…	③この専攻で私が学びたいと思ってることは… ④入学した時、この専攻で私が学びたいと思っていたことは…	①この学校で私が学ぼうと思ってることは… それ（学ぼうと思ってること）は、私にとって… ③この学校を卒業後、私は… ④10年後、私は… ⑤将来のために、今からしておきたいことは… ⑩同左 ⑪もし可能なら、私が本当にやりたい仕事（職業）は… その理由は…
将来・職業	⑫誰かと相談してみたいと思うことは… ⑬私がうらやましいと思う人は… ⑭私と比べると、他の学生は… ⑮私をわかって（理解して）くれる人は…			⑥「あなたはどういう人ですか？」とだれかに聞かれたら、私は… ⑦これまで私がしてきたことは… ⑧どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという… 今そのことについて… ⑨私がこれから打ち込むとしたら… ⑩女性であることは私にとって…
他者・母親	⑯私の今の生活は… ⑰いま一番関心のあることは…			⑬私にとって本当の女性の友達は… ⑭私の母は私の生き方に対して…
生活全般				
情報や環境 のイメージ		①情報化社会という言葉を聞くと私は… ②コンピュータを使っている人について私 が感じるのは… ③コンピュータを習うことは私にとって… ④環境という言葉を聞くと私は…	⑦同左 ⑧同左	⑨同左 ⑩同左

①, ②, ③, ④…は、配列順を示す。

確な将来像を形成しえず、退学するというタイプ；

③おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

④おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それを諦めてそれと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を新たに形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

⑤おそらく中高生時代、明確な将来像をもつが、多くは、それと合った大学の入試に失敗したためそれを諦めて、まれには最初からその将来像を諦めてその将来像に合った大学を受験せず、それと合わない大学に進学し、いったんはその大学での学習を踏まえた将来像を新たに形成させるが、再考するうちに当初の希望が強まり、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

⑥おそらく中高生時代、明確な将来像をもち、(多くは、それと合った大学の入試に失敗したため)それとやや合った大学に進学するが、その将来像にもっと合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；

である。

以下に、各タイプ別に6つの事例を示したい。
なお、人名は全て仮名である。

【タイプ1】おそらく中高生時代、明確な将来像をもたず、大学進学後も大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、退学するというタイプ

事例：浅田さん(社会環境情報学専攻)

本例の場合、「あなたはどのような人ですか？」とだれかに聞かれたら、私は「自分では何も決めることが出来ない人間」、〈これまで私がしてきたことは〉に「これと言えことは何もない」と記しており、Marciaの言葉を借りるならば、「危機」を経験していない人のように察せら

れる。

大学には「第2志望校」として入学する。この進学は、〈どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという〉に「大学進学すること」と記していることから、迷ってなされたと考えられる。もっとも、記述は全般的に淡々としており、あまり深刻さを感じさせない。「第2志望」としての入学ではあるが、〈今そのことについて〉に「大学進学してよかったと思えるようがんばりたい」、〈この学校で私が学ぼうと思っていることは〉に「コンピュータについて」、〈私がこれから打ち込むとしたら〉に「パソコン」と記しており、大学での教育に添って学んでいこうとする気持ちを読み取れる。

しかし、「自分では何も決めることが出来ない人間」であるためであろうか、将来像や職業像についての記述はきわめて貧弱なものとなっている。たとえば、〈私にとって仕事をするには〉に「まだわからない」、〈もし可能なら、私が本当にやりたい仕事(職業)は〉に「とくにない」、〈この学校を卒業後、私は〉に「まだわからない」、そして〈10年後、私は〉に「専業主婦をしていたい」、といった具合である。

上述したように、進学した大学で「コンピュータについて」学ぼうと思っていると記するものの、その学ぶことを踏まえたはっきりした将来像(職業像)は記されない。たとえば、〈それ(学ぼうと思っていること)は、私にとって〉に「将来必ず役立つもの」と記するが、それは生活に役立つという意味なのか職業に役立つという意味なのか、明瞭ではない。また〈将来のために、今からしておきたいことは〉に「言葉使いを新める」と記するだけで、ここからも将来像・職業像を窺うことができない。つまり、入学時のSCTからは将来像の形成を感じさせるものはないということになるだろう。

入学後のことは明らかではない。しかし、入学後わずか半年で、「人間関係に疲れてしまい学校にいけなくなってしまった」という理由で退学するに至っており、結局、大学での学習を踏まえた将来像は形成されなかったといえるだろう。

なお、上に述べたこと以外のSCTの記述は次の通りである。

〈「社会情報学部って何？」と他の人から聞かれると、私は「文系と理系のまざった学部」

〈女性であることは私にとって〉「すばらしいこと」

〈私にとって本当の女性の友達〉「自分を本当に理解してくれる人」

〈私の母は私の生き方に対して〉「なにも言わない」

さて、本例を典型とする一群の特徴は、将来についての希望や意志というものを示さないことにある。たとえば、別の退学していった学生も〈10年後、私は〉に「幸せに暮らしている」とのみ記しているのであった。また、学校が合わないといった理由で退学するが、今後どうするのか、どういう学校に入りなおすのか、といったことを語らないということも特徴としている。そもそもそうしたことをあまり考えていないといった方がよいであろう。

【タイプ2】おそらく中高生時代、抽象的夢想的な将来像をもち、大学進学後に大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、退学するというタイプ

事例：池田さん（社会情報処理学専攻）

本例においても、〈「あなたはどのような人ですか？」とだれかに聞かれたら、私は〉に「まだわからない」、〈これまで私がしてきたことは〉に「特にたいしたことは、してきていない」、〈どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという〉に「一度もない」と記しており、前事例の浅田さんと同じく、どう生きていくか深く悩んだ経験がない、言い換えれば、過去の危機を経験していない人のように察せられる。

大学には、別の大学の芸術学部の入試に失敗して、「第3志望以下」の学校として入学する。そのためであろうか、進学した大学で学ぶことに対して期待が乏しく、自分がその学びに向いているのか否か不安になる様子も示さない。〈この学校

で私が学ぼうと思っていることは〉に「社会情報学」、〈それ（学ぼうと思っていること）は、私にとって〉に「初めての学問」、〈「社会情報学部って何？」と他の人から聞かれると、私は〉に「コンピュータなんかを使うと思うと答える」と、記述はいま一つ重みを感じさせないのである。

職業については、〈私にとって仕事をするには〉に「楽しみであって欲しい」、〈もし可能なら、私が本当にやりたい仕事（職業）は〉に「普通のOLにはなりたくない」、〈その理由は〉に「もっとやりがいのある仕事をしたいから」と、意欲は示すものの、具体的なことは述べられない。将来像についての記述も同様で、〈この学校を卒業後、私は〉に「大物になる」、〈10年後、私は〉に「大物になる」と、現実離れた記述の繰り返しとなり、〈この学校で私が学ぼうと思っていること〉をどこまで踏まえているのか疑わしい記述となっている。そして、〈私がこれから打ち込むとしたら〉に「将来の夢を作って、それに打ち込む」と記しているが、その言葉がしみじみも示すように、将来は現実とまだ接触しない「夢」の範囲にあり、その夢もまだ作られていない、ということができるだろう。

結局、入学から2年後に英語の専門学校に入りなおすために退学するに至った。ところで、もし最初から英語を深く学びたいと思っていたならば、他の多くの学生のように、〈将来のために、今からしておきたいことは〉に英検やTOEICといったことを記したのではないだろうかと思われる。入学後のことは詳らかではないが、「大物になる」という現実味の乏しい夢が続き、それに添った形で英語の専門学校への入りなおしがなされた、と推測するのが自然であろう。

なお、上に述べたこと以外のSCTの記述は次の通りである。

〈将来のために、今からしておきたいことは〉「やるべきことはちゃんとこなす」

〈女性であることは私にとって〉「良かったと思う時もあるし、嫌だと思ふ事もある」

〈私にとって本当の女性の友達〉「何でも話せる人」

〈私の母は私の生き方に対して〉「まだ私の生き方はなっていないから、特に何も思われていない」

さて、本例を典型とする一群の特徴は、学校で学ぶことと関係しない、具体性のない誇大な、夢想的な将来を語ることにある。別のある退学した学生も〈この学校を卒業後、私は〉に「bigになる」とのみ記しているのであった。

「社会情報」——さらにはおそらく最近増えている「国際」とか「現代」——といった言葉はこうした学生を誘い込む何かを有しているのかもしれない。

【タイプ3】おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ

事例：浮田さん（社会情報処理学専攻）

本例の場合、前2例と異なり、どういう領域の職業に関心があるのかは明快である。〈もし可能なら、私が本当にやりたい仕事（職業）は〉に「福祉に携わりたい」と記しているからである。もっとも、「携わりたい」というだけで、そこで何をしたいのかについては述べられていないということからすれば、必ずしも十分考えられた上での結論とはいえないかもしれない。それは、その職業を志向した理由が「母がその様な仕事をしているから」（〈その理由は〉に対する記述）であることと関連するかもしれない。

ともあれ、この、十分考えられた上での結論ではないらしいということを裏付けるのが、〈どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという〉に対する記述である。「はっきりした目標をもっていないことと、飽きっぽい性格のこと」というのである。つまり、「福祉に携わりたい」とはいえ「はっきりした目標をもっていない」というのである。〈これまで私がしてきたことは〉に対する「英語は好きなので、それは頑張った」という記述からも、必ずしも目標をもって生きてき

たわけではないことが窺い知れよう。

大学には推薦入試を経て「第1志望校」として入学する。〈今そのこと（どう生きていくか、いままで迷ったこと）について〉に「まだ解決していない」と記しており、おそらくは「はっきりした目標」を巡って迷いが続いていることが察せられる。しかし進路をめぐって強い悩みがあったことを示す記述はなく、実際、それほど深刻な悩みではなかったと察せられる。一貫し確固とした将来像・職業像をもっていなかったがゆえに、悩むことも少なかったともいえよう。

さて、進学した大学では、〈この学校で私が学ぼうと思っていることは〉に「パソコンを自由に使いこなせるようになり、いろんな場面で活用したい」、〈それ（学ぼうと思っていること）は、私にとって〉に「自分の財産として、将来役立てたい」と記していることから、パソコンの勉強を期待しているのがわかる。しかし、「いろいろな場面」「将来」という曖昧な言葉が使われていることから察せられるように、大学でパソコンを学ぶことと職業とは必ずしも結びついているわけではなさそうである。〈「社会情報学部って何？」と他の人から聞かれると、私は〉に「パソコンを自由自在に使いこなせるようになる学部と一応言う」と、「一応」を付しているのもこのことと関連するかもしれない。自分といまいる学部あるいはパソコンの勉強との間に心理的距離があることを示唆しよう。

こうしたことをさらに裏付けるのが、〈この学校を卒業後、私は〉に対する記述である。「高齢者のために役立つ仕事をしてみたい」と、大学で学ぶことと全く関連のないことを記するのである。福祉への志向とパソコンの学習との食い違いは明らかであり、それがため、〈10年後、私は〉に「どうなっているか想像できない」としか記しえなかったといえるだろう。〈将来のために、今からしておきたいことは〉に「資格を取りたいのと、スポーツをしたいと思う」と、漠然としたことしか記されないのもこうした背景から理解されよう。この「資格」がどういう領域でのものなのか分からないが、本人にも明確ではなかったのか

もしれない。

結局、入学から4年後、福祉の学部に入りなおすために退学するに至った。〈「あなたはどういう人ですか？」とだれかに聞かれたら、私は〉に「静かな方だけど、やりたいことはやり通す性格」と記しているが、「福祉に携わりたい」という希望を「やり通」したといえるかもしれない。

なお、上に述べたこと以外のSCTの記述は次の通りである。

〈私がこれから打ち込むとしたら〉「部活でスポーツしたい」

〈私にとって仕事をすることは〉「いきがいを見つける」

〈女性であることは私にとって〉「良かったと思う」

〈私にとって本当の女性の友達は〉「中学の時から大切な友達が一人います」

〈私の母は私の生き方に対して〉「あまり口をはさまない」

さて、本例を典型とする一群の特徴は、志向する分野を有するが、それほど具体的でなくまたその志向も強くないため、大学に入ってもそれほどの不本意感を持たないが、その志向する分野とその大学での学習とが結びつかないため、入学時における将来像が、希望としても描けないことにある。別の退学していった学生も将来「何をしているかは、まだ決めていない」と記しているのがあった。

【タイプ4】おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それを諦めてそれと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を新たに形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ
事例：江田さん（社会環境情報学専攻）

本例の場合、〈「あなたはどういう人ですか？」とだれかに聞かれたら、私は〉に記述がなく、また〈これまで私がしてきたことは〉に「中学と高校 女子校生活、受験生」と精彩に乏しい記述しかなく、結局、自分は何者なのか、自分はどう生

きていくのかについて、解答を見出していないかように察せられる。

このことと符合するかのようには、将来の職業像についての記述も、具体的な希望は認められるものの、確固としているわけではない。〈もし可能なら、私が本当にやりたい仕事（職業）は〉に「獣医さん、野性動物保護etc.」、〈その理由は〉に「動物が大好きだから」というに止まるのである。

ともあれ、そうした希望をかなえるべくある大学の農学部を受験するも不合格となり、「第3志望以下」の学校として「社会情報学部」に入学した。この進学について、〈どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという〉に「大学のこと」、〈今そのことについて〉に「悩み中」と記しており、悩みや迷いがあったこと、またその悩みや迷いは入学後も継続していることがわかる。

進学した大学で学びたいのは「生物系の勉強」（〈この学校で私が学ぼうと思っていることは〉に対する記述）である。いっぽう、〈「社会情報学部って何？」と他の人から聞かれると、私は〉に「コンピュータ系？」とも答える。ここで、あえて「？」を付していることから、大学で実際に学ぶことが十分に位置づけられていない様子を感じ取ることができる。このような場合、大学での学習を踏まえた将来像の形成が困難となるかもしれない。事実、〈この学校を卒業後、私は〉に「とりあえずどこかに」、〈10年後、私は〉に「結婚して子どもが2人いる」と、記述は貧弱なのである。そして、〈将来のために、今からしておきたいことは〉に「花嫁修行、女を磨く」と記するのである。

入学後のことは詳らかではない。入学時の「悩み中」が続いたことは十分に推測され、結局、入学から1年後、「校風が合わない。教職がとれない。他の大学でやりたい事プラスになる事を学びたい」という理由で、国際的な農業開発の学部に入りなおすために退学するに至った。

なお、上に述べたこと以外のSCTの記述は次の通りである。

〈それ（学ぼうと思っていること）は、私にとっ

て)「プラスになる」

〈私がこれから打ち込むとしたら〉「生物系の勉強、友達作り、恋愛、サークル、バイト etc.」

〈私にとって仕事をすることは〉「社会に出ること。自分で収入を得ること。自立すること」

〈女性であることは私にとって〉「誇り!!」

〈私にとって本当の女性の友達〉「一緒に遊んだり、相談し合ったりする仲間」

〈私の母は私の生き方に対して〉「あまり納得していない様子」

さて、本例を典型とする一群の特徴は、一つには、本学への入学を巡って悩みや迷いが継続していること、また一つには、卒業後や10年後の見通しを持たない(持てない)ということである。別のある学生も〈どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという〉に「この大学に入るべきか、浪人するべきかと言うこと」、〈今そのことについて〉に「まだ少し納得しきれていない」、また〈この学校を卒業後、私は〉に「OLになりたいとは思わない」、〈10年後、私は〉に「結婚していたら外では働かず専業主婦になりたい」と記しているのがあった。一般には、願望に止まるとしても、仕事(職業)に関して、～になっている、～になっていた、といった記述が多いのと好対照をなしている。

【タイプ5】おそらく中高生時代、明確な将来像をもつが、多くは、それと合った大学の入試に失敗したためそれを諦めて、まれには最初からその将来像を諦めてその将来像に合った大学を受験せず、それと合わない大学に進学し、いったんはその大学での学習を踏まえた将来像を新たに形成させるが、再考するうちに当初の希望が強まり、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ

事例：沖田さん(社会情報処理学専攻)

本例の場合、〈もし可能なら、私が本当にやりたい仕事(職業)は〉に「獣医師です」、〈その理由は〉に「小学生のころからずっと夢だったからです」と記しており、具体的な将来像(職業像)

をもっていたことがわかる。

しかし、ある大学の獣医畜産学部の入試に不合格となり、「第3志望以下」の学校として「社会情報学部」に入学する。その際、〈どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという〉に「浪人するかしないかを決めるときです」と記しており、相当な悩みがあったことが分かる。

しかし、やりたい分野と異なる学部に進学したことについては「後悔していません」(〈今そのことについて〉に対する記述)と記述し、また〈「社会情報学部って何?」と他の人から聞かれると、私は〉に「これからの社会に適応した必要不可欠な学部です」、〈この学校で私が学ぼうと思っていることは〉に「技術的な情報処理と現代におけるコンピュータの役割、また問題点です」、〈それ(学ぼうと思っていること)は、私にとって〉に「将来に必要なことで、いま一番興味があること」と記しており、入学した大学での学習を踏まえて将来像を構築しようとしている様子がわかる。

将来像については、〈この学校を卒業後、私は〉に「就職して経済的自立をするとともに、今までお世話してくれている父母に恩返ししたいです」、〈10年後、私は〉に「キャリアウーマンで働いていると思います」と、「獣医師」でないが「経済的自立」し「キャリアウーマン」になろうと思っていることを述べる。もっとも、これらの記述は、〈この学校で私が学ぼうと思っていることは〉に「技術的な情報処理と現代におけるコンピュータの役割、また問題点です」と記した割には、情報処理やコンピュータについて何も触れておらず、少しく具体性に乏しいといえるかもしれない。また先の「小学校のころからの夢」の実現のため「浪人するかしないか」という悩みの記述からすれば、少し不釣り合いの感もする。つまり、表面的には進学した大学での学習にそおうとしつつも、奥深いところではそれに逆らう部分があるのではないかと推測される。

入学後のことは詳らかではない。しかしこの奥深いところでの葛藤が持続したことは十分推測され、結局、入学から1年半後に、動物看護師を目

指し専門学校に入りなおすため、退学するに至った。「獣医師」ではないが、同じ分野を選択したということになろう。

ところで、〈これまで私がしてきたことは〉に「自分が一番楽しいと思ったことをやってきているので、たくさんのことをやっていると思います」、〈私がこれから打ち込むとしたら〉に「いままでのように人生を楽しく生きることです」、〈私にとって仕事をするとは〉に「遊びを楽しくすることでもあり、自分を高めることだと思います」と記しているのは暗示的である。もし表面的には納得するものの、奥深いところで本学での学習およびそれを踏まえた職業に不協和な部分があるとすれば、「楽しく生きること」はできないからである。

なお、上に述べたこと以外の SCT の記述は次の通りである。

〈将来のために、今からしておきたいことは〉
「一般常識を身につけることと、友達をたくさんつくることです」

〈あなたはどのような人ですか?〉とだれかに聞かれたら、私は「変な人です。取り合えず友達になってみてください」

〈女性であることは私にとって〉「うれしいことです」

〈私にとって本当の女性の友達は〉「気兼ねしないでいられる人」

〈私の母は私の生き方に対して〉「あこがれを感じるし、あんな風に生きたいと思います」

さて、本例を代表とする一群の特徴は、いったんは進学した大学で学ぶことを受け入れることを表明するが、そこにわずかながらの不自然さが残ることである。

ちなみに、本例の「楽しく生きること」に類似した表現が、他の退学者においても時折見られることがあるのは興味深い。たとえば、ある者は〈将来のために今からしておきたいことは〉に「後悔しないよう今精一杯やる」と記している。「後悔しない」「楽しく生きる」といった気持ちが強ければ、希望しなかった大学で、このまま、

悩みつつ、大学生を送ることはできないであろう。こうしたことに重きを置くパーソナリティと退学との可能性も示唆されよう。

【タイプ6】おそらく中高生時代、明確な将来像をもち、(多くは、それと合った大学の入試に失敗したため)それとやや合った大学に進学するが、その将来像にもっと合った学校に入りなおすために退学するというタイプ

事例：河田さん(社会生活情報学専攻)

本例の場合、〈あなたはどのような人ですか?〉とだれかに聞かれたら、私は「正しいと思ったことを貫く人間ですと答える」、〈これまで私がしてきたことは〉に「アメリカ1年留学、チャリーディング部所属、受験勉強…沢山の良い友達を作ってきた」と記しており、自分の生き方に強い自信をもっていることが読み取れる。〈私にとって本当の女性の友達は〉に「自分の意志をもった、しっかりした、やさしく心配りのできる、他人の心の痛みがわかる人」と記しているが、これは実は彼女自身の理想像といえるだろう。

こうした河田さんは、〈もし可能なら、私が本当にやりたい仕事(職業)は〉に「NPO団体の社会福祉政策」と記していることから、社会福祉の領域で働くという具体的な将来像をもっていたことがわかる。それも「これから社会福祉は必ず考えねばならない問題、NPOでお金のためじゃなく、自分と他人の為に働いて満足をえたい」(〈その理由は〉に対する記述)という理由からであった。また〈私にとって仕事をするとは〉に「自分の生きがいになればいいと思う」と記している。つまり「お金のためじゃなく」「生きがい」といったことを重んじる人であることがわかる。

このような彼女はある大学の総合社会科学の学部入試に不合格となり、「第3志望以下」の学校として「社会情報学部」に進学した。その目的は明快である。〈この学校で私が学ぼうと思っていることは〉に「コンピュータの使い方と社会福祉(社会保障制度などを含む政策について)であ

る」,〈それ(学ぼうと思っていること)は、私にとって)に「将来進もうと思っている道である」と、記しているのである。彼女が入学した当時、進学先の大学では「社会福祉論」や「社会福祉援助技術論」といった教科目が開講されており、将来像にやや合った学部と認識されて進学したものと推測される。ここで、学ぶこととして、「コンピュータ」と「社会福祉」を挙げているのは興味深い。もちろん志向するのは後者であるが、「社会情報学部」に進学した以上、コンピュータについても学ぼうと思っているかのようである。

さて、将来像は具体的であるばかりではなく、一貫している。〈将来のために、今からしておきたいことは)に「勉強(トフル、社会福祉国家試験のためのダブルスクール etc.)」,〈私がこれから打ち込むとしたら)「トフルと社会福祉の免許取得」と記し、〈この学校を卒業後、私は)に「アメリカ、もしくは北欧の大学院に進み、福祉について学びたい」,〈10年後、私は)に「自分の仕事に生きがいを感じてる」と、一貫した将来像を述べるのである。

〈どう生きていくか、いままで迷ったことは何かという)に対して「将来について。確固とした目的意識のないまま生活するのは嫌だから、また〈今そのことについて)に「この4年でもっと深く考えてみようと思う」と、述べる。残念なことに、この「将来」と大学での学びとの関係、また入学後の「深く考えてみよう」という内容については詳らかではない。

結局、入学から1年後、第1志望にしていた大学を再度受験して合格し、同大学に入りなおすために退学するに至った。

多義的な言葉を含む名称の学部においては様々な分野の教科目が開講され、それがゆえに、自分が学びたいと思っていることが学べると考えて学生が入学してくるが、しかし、なかには、それに飽き足らず、より専門的あるいは総合的な学部で学びたいという者も出てくるのである。本例が、〈「社会情報学部って何?」と他の人から聞かれると、私は)に対して「『何でもありのところだよ』と答える」と記しているのは示唆的であり、

「何でもあり」だから入学するが、一つのことを専門的に学びたいという段になると、そしてその分野での資格取得を目指すという段になると、やはりそれに合った大学に移らざるを得なかったといえるだろう。

なお、上に述べたこと以外の SCT の記述は次の通りである。

〈女性であることは私にとって)「すばらしいこと」

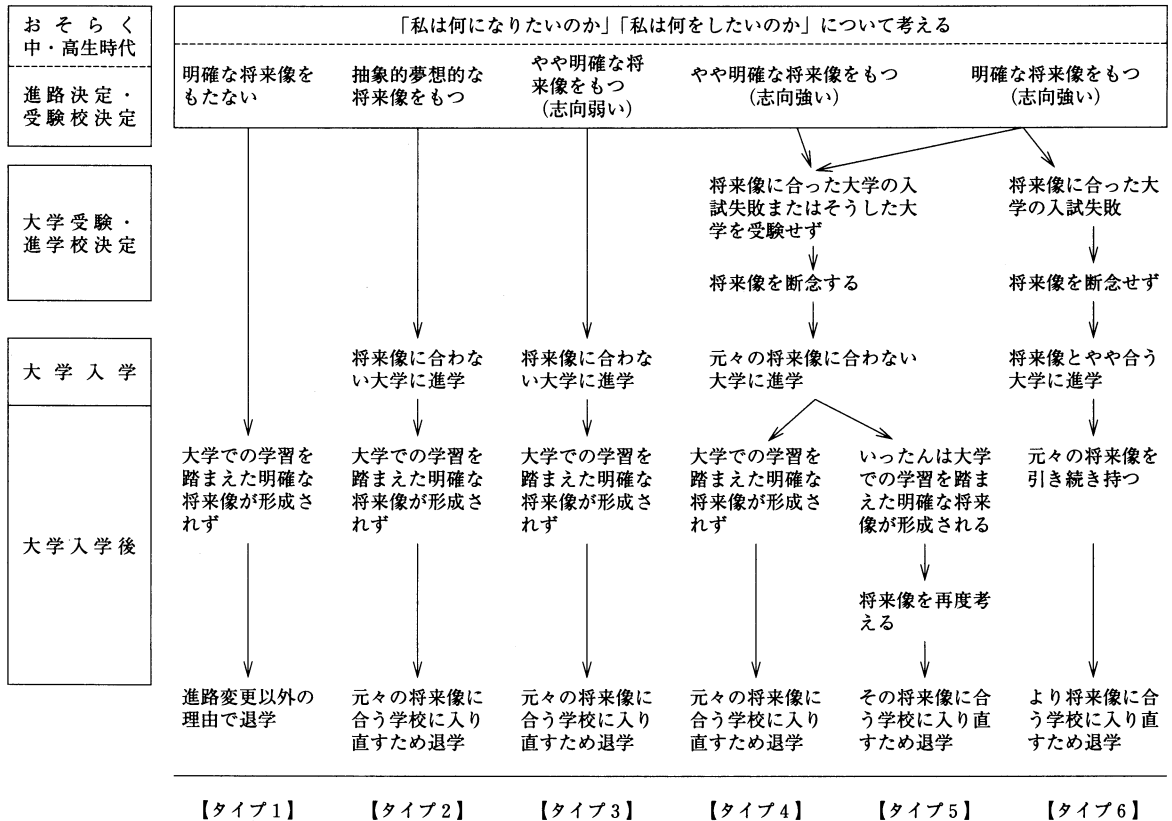
〈私の母は私の生き方に対して)「賛成してくれる。応援してくれる」

さて、本例を典型とする一群の特徴は、記述の内容が一貫しており、特に進学した大学で学ぼうと思っていることと将来像との間に矛盾がなく、仕事を「いきがい」と肯定的に捉えていることである。たとえば、別の退学していった学生も〈この学校で私が学ぼうと思っていることは)に「環境をよくするためにはどうしたらいいのかということ」,〈この学校を卒業後、私は)に「環境を守れるような仕事(いろいろな意味で)につきたい」,〈私にとって仕事をすることは)に「楽しみなことである」,と記しているのであった。

ちなみに、この例も、〈私の母は私の生き方に対して)に、河田さんと全く同じく「賛成してくれる」と述べる。「正しいと思ったことを貫」(河田さんの記述)こうと模索する娘とそれを応援する母といった様相も窺い知られよう。

3. おわりに

以上、退学していった者の入学時における SCT の記述を、入学前にまた入学時にどのような将来像をもっていたかという点から分析し、退学者には、少なくとも6タイプあることを、事例を交えて述べた。その6タイプとは、①おそらく中高生時代、明確な将来像をもたず、大学進学後も大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、退学するというタイプ；②おそらく中高生時代、抽象的・夢想的な将来像をもち、大学進学後に大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、



備考：【タイプ5】で示した「将来像に合った大学の入試失敗またはそうした大学を受験せず」「将来像を断念する」「将来像を再度考える」は他のタイプにおいてもあり得るが、もともとの将来像への志向が強くない場合それほどの役割はもたないと考えられることから、また図に記入したばあい煩雑になることから、図では省略した。

図1 入学時のSCTの記述から推察される退学者の将来像と退学までの過程

退学するというタイプ；③おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；④おそらく中高生時代、やや明確な将来像をもち、それを諦めてそれと合わない大学に進学するが、その大学での学習を踏まえた明確な将来像を新たに形成しえず、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；⑤おそらく中高生時代、明確な将来像をもつが、多くは、それと合った大学の入試に失敗したためそれを諦めて、まれには最初からその将来像を諦めてその将

来像に合った大学を受験せず、それと合わない大学に進学し、いったんはその大学での学習を踏まえた将来像を新たに形成させるが、再考するうちに当初の希望が強まり、当初の将来像に合った学校に入りなおすために退学するというタイプ；⑥おそらく中高生時代、明確な将来像をもち、(多くは、それに合った大学の入試に失敗したため)それとやや合った大学に進学するが、その将来像にもっと合った学校に入りなおすために退学するというタイプ、である。各タイプの将来像と退学までの過程を図示すると、図1のようになろう。各タイプ間に明瞭な境界があるというわけではなく、したがって各タイプ別の人数を述べることは

困難であるが、①②のタイプの者が少なく、⑤のタイプの者が多いことはいいえよう。第1志望校の入学試験に失敗し、浪人して翌年再度チャレンジしようかそれとも合格した大学に進もうか悩み、ともかくも進学した大学でのカリキュラムに依じて学ぼうと決めるが、将来像を描くに至らず、結局はもともと関心の高かった領域を学ぶために、それに相応しい学校に入りなおすために退学する、というのが最も多いパターンなのである。

しかし考え直せば、他の学校に入り直すために退学するというのは、将来像・職業像をもちそれに向けて何とかしようとする試みをまだなしえているということを意味しよう。つまり、問題とすべきは、学校での勉学に対する意欲を失って退学する者、またざるざると在籍し続ける者ということになるだろう。

多義的な名称の学部にては、何を学び、自分をどう位置づけるか、についての学生の主体的とりくみが、他の伝統的な名称の学部の学生よりもいっそう重要なのであり、教員は学生がそうした取り組みをなすことを支援するような働きかけをすることが必要であると思われる。

謝辞

本小論をまとめるにあたり、大妻女子大学社会情報学部による公式的な調査である「学生生活調査」を利用することを快諾して下さった学部長はじめ御協力いただいた諸先生方に、深謝したい。

文献

- 藤井久和・木下 清・藤井ナオミ (1972) 「採用時のSCT評価とその後の職場適応状況との検討」大阪府立公衆衛生研究所報告 精神衛生編, 10, 47-56.
- Marcia, J. E. (1964) Determination and construct validity of ego identity status. Unpublished doctoral dissertation, The Ohio State University.
- 松木光子・山口花江・宮地 緑・赤木知子 (1977) 「看護学生の精神衛生管理について」看護教育, 18, 689-692.
- 下仲順子・田宮美代子・藤井久和・豊中啓尹子 (1971) 「高校生の精神衛生調査—SCT-Sを中心として—」大阪府立公衆衛生研究所報告 精神衛生編, 9, 1-10.
- 園田雅代・中签洋子 (1987) 「職業的同一性を通してみた中堅女子社員の研究 その1:SCT法による検討」日本心理学会第51回大会発表論文集, p. 554.
- 若林佳史・前納弘武・草柳千早 (1994) 「ある新名称に基づく新設学部における学生の専門領域の認識と学習意欲の把握の試み—大妻女子大学社会情報学部の1期生を例に—」大妻女子大学紀要—社会情報系—社会情報学研究, 2, 229-259.

**Characteristics of Students Leaving without Graduating
from School, of University, Bearing a Multivocal Title :
The Case of the School of Social Information Studies,
Otsuma Women's University
Part 2.
Six Types of the Students Leaving the School without Graduating
from a Viewpoint of the Intention and a Vision of Her Future**

YOSHIFUMI WAKABAYASHI

School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

In order to comprehend the possible problems with the students of the school, of university, bearing a multivocal title, the statements to SCT (Sentence Completion Test), undertaken at the admission, of the freshmen of *the School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*, were studied. From a viewpoint of what she intends to become and what she thinks she will be, namely her intention and the vision of her future, there were at least six types found as follows :

1) Type of student neither having had a definite vision probably while at junior high school or high school, and, even after entering university, not having a vision based on the learning at the university, and, finally, leaving the university without graduating.

2) Type of student having had an abstract vision probably while at junior high school or high school, and, after entering university, not having a definite vision based on the learning at the university, and, finally, leaving the university without graduating.

3) Type of student having had a somewhat definite vision probably while at junior high school or high school, and entering university unsuitable for the vision, but not having a definite vision based on the learning at the university, and, finally, leaving the university without graduating for re-entering another school suitable for the original vision.

4) Type of student having had a somewhat definite vision probably while at the junior high school or high school, and, with giving up the intention, entering the university unsuitable for the vision, but not having, newly, a definite vision based on the learning at the university, so, finally, leaving the university without graduating for re-entering another school suitable for the vision.

5) Type of student having had a definite vision probably while at junior high school or high school, and, with giving up the intention (commonly because of the failure of the entrance examination of the university suitable for the vision), entering the university unsuitable for the vision, and once having, newly, a vision based on the learning at the university, but the original intention being strengthened as reconsidering, and leaving the university without graduating for re-entering another school suitable for the original vision.

6) Type of student having had a definite vision probably while at junior high school or high school, and entering the university slightly suitable for the vision (commonly because of the failure of the entrance examination of the university more suitable for the vision), and leaving the university without graduating for re-entering another school more suitable for the vision.

Key Words (キーワード)

Withdrawal from school (退学), Sentence Completion Test (文章完成法)